

図1. バレー大会(春)アンケート回答者 年代

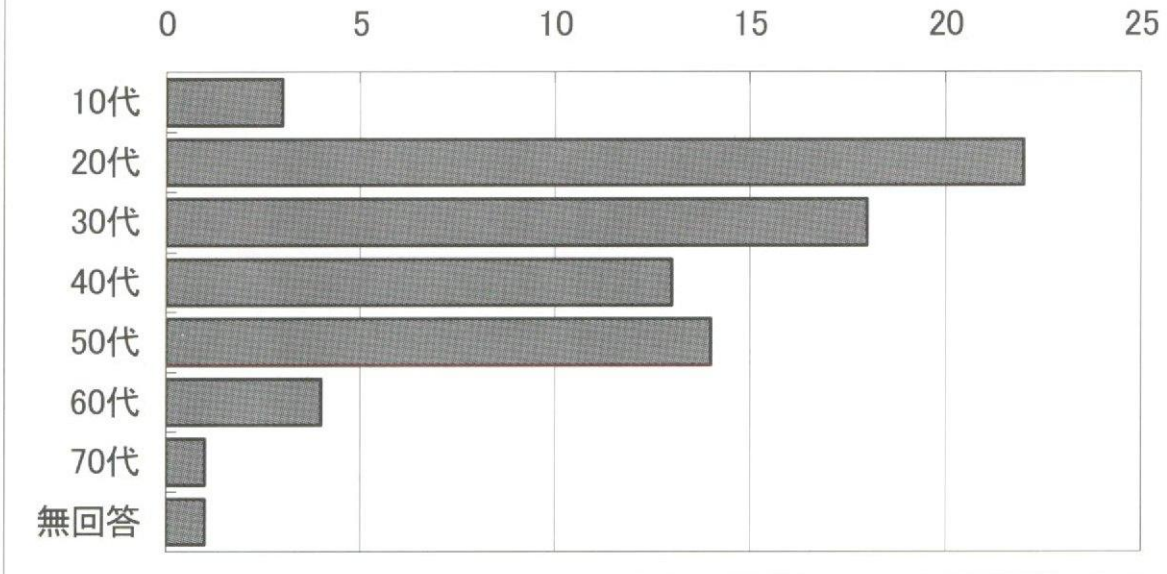


図2. バレー大会(春)アンケート回答者 居住地(N=76)

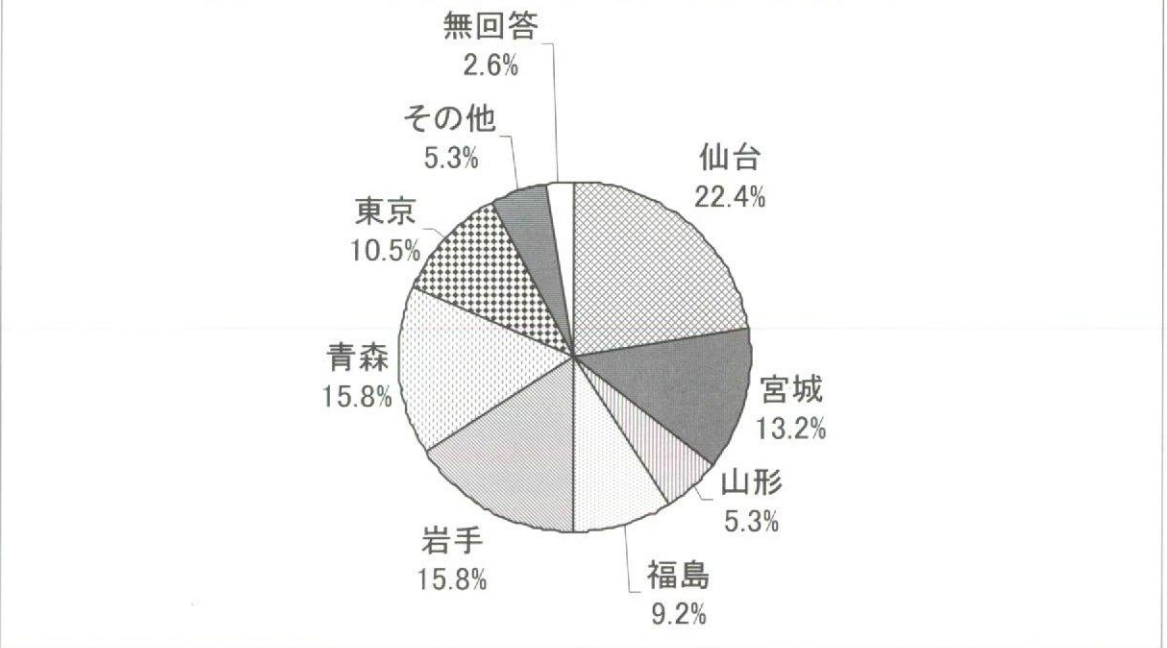


図3. バレー大会(春)アンケート設問  
「現在、新しい治療薬で延命治療ができるようになった」  
正答率(全体67.1%)

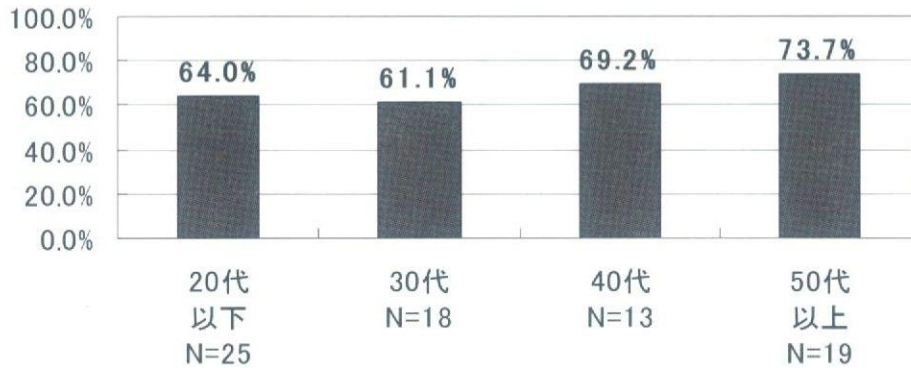


図4. バレー大会(春)アンケート設問  
「HIV抗体検査では、感染後2~3日で感染がわかる」  
正答率(全体81.6%)

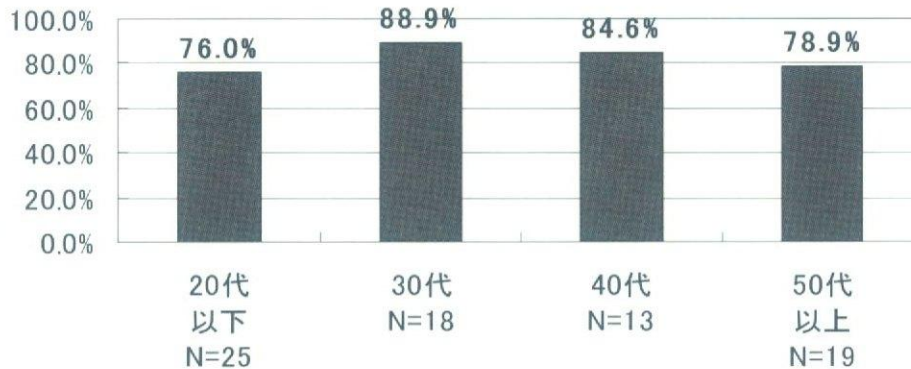


図5. バレー大会(春)アンケート設問  
「性感染症にかかっているとHIVに感染しやすい」  
正答率(全体68.4%)

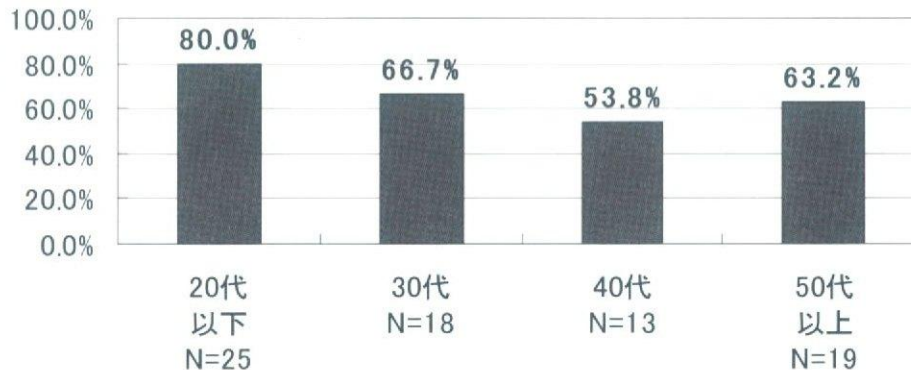


図6. バレー大会(春)アンケート設問  
「オーラルセックスで、性感染症に感染する可能性がある」  
正答率(全体88.2%)

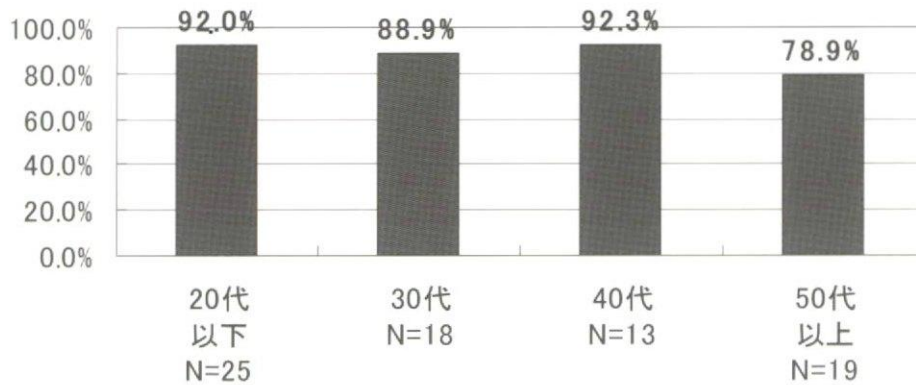


図7. バレー大会(春)アンケート設問  
「アナルセックスのとき、射精しなければタチもウケもHIVに感染しない」  
正答率(全体94.7%)

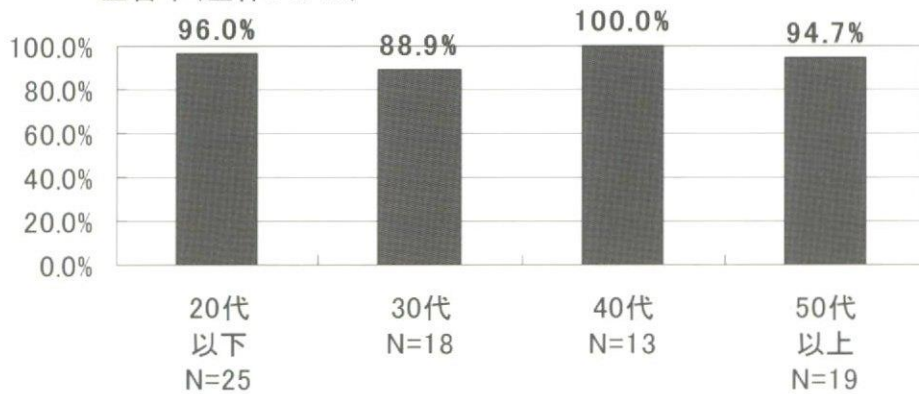


図8. バレー大会(春)アンケート設問  
「保健所で名前を言わずに無料でHIV検査ができる」  
正答率(全体85.5%)

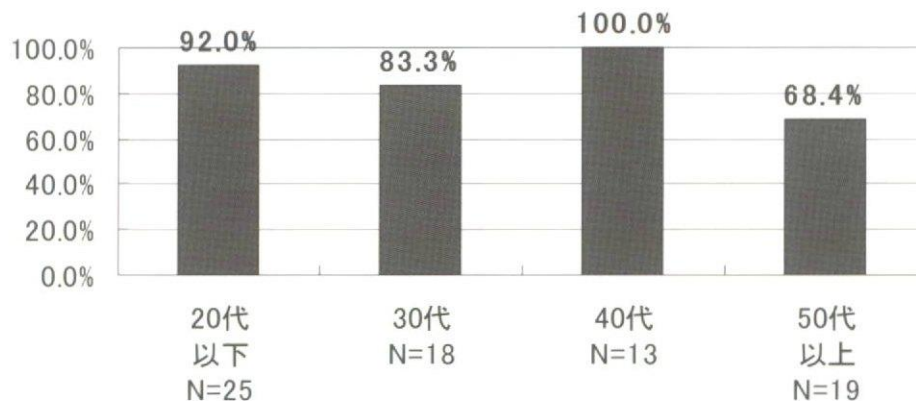


図9. バレー大会(秋)アンケート回答者 年代

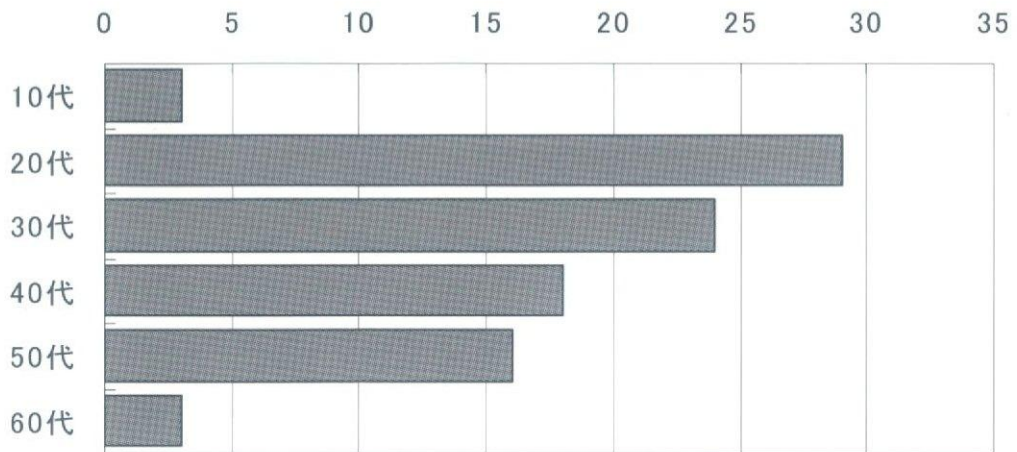


図10. バレー大会(秋)アンケート回答者 居住地(N=93)

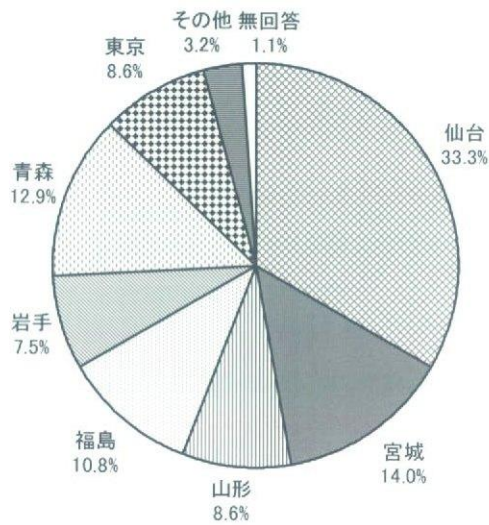
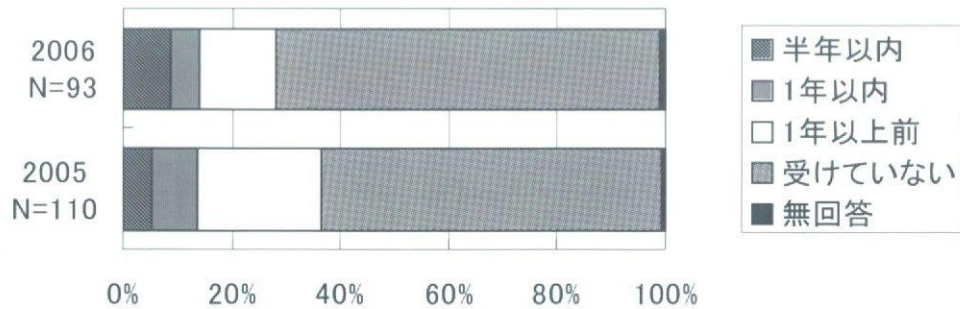
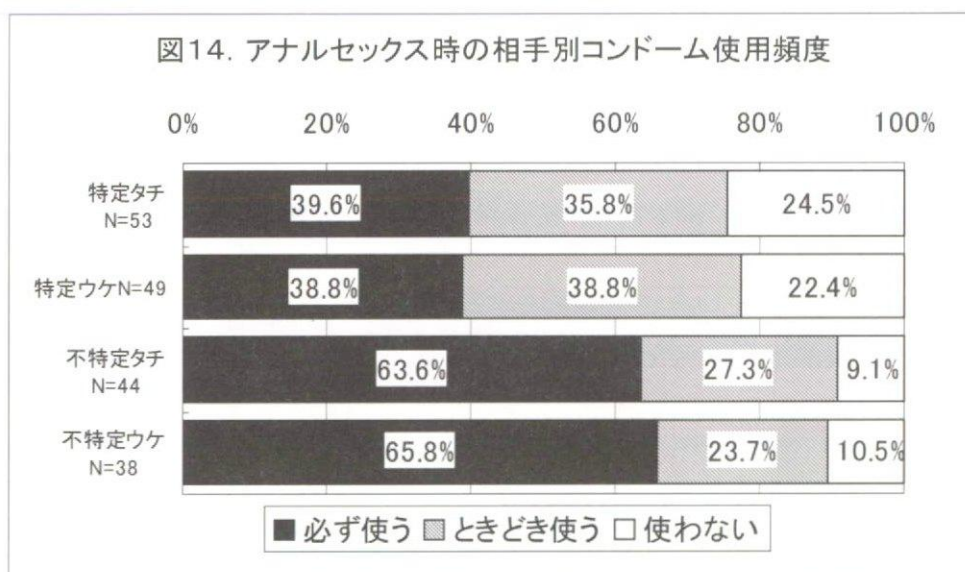
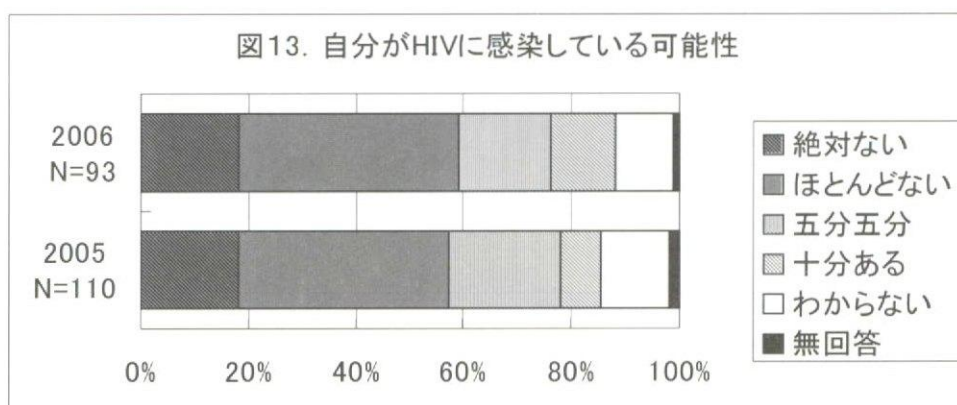
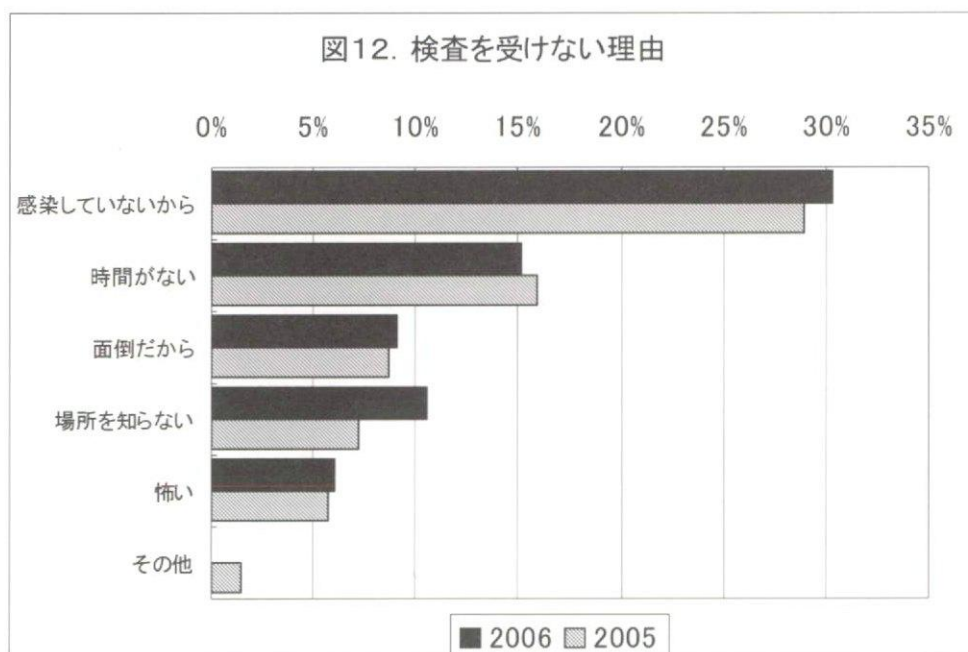


図11. HIV抗体検査の受検経験





## 東京地域における同性間の HIV/STI 感染予防啓発の普及促進に関する研究

分担研究者 佐藤未光 (Rainbow Ring 代表、ひかりクリニック)  
研究協力者 荒木順子、石川毅、江島啓介、木南拓也、河辺宗知、柴田恵、張由紀夫、土田健太郎、  
福岡丈幸、松永夢暁 (Rainbow Ring)、木村博和 (横浜市南福祉保健センター)、  
市川誠一 (名古屋市立大学看護学部)

### 研究要旨

東京地域における男性同性間の HIV/STI 感染予防啓発を目的として、早急かつ有効な啓発普及の検討をおこなった。東京のゲイコミュニティの規模と多様性を考慮し、コミュニティに根ざした予防啓発を推進するために、当事者参加による CBO (Rainbow Ring) との協力体制のもと、予防啓発活動の展開を図り検討している。

- 1) コミュニティセンター「akta」は、コミュニティに見える活動を展開すべく、様々なイベントや展示会、講演会などへの活用を継続し、認知の高まりと共に予防啓発活動の拠点としての役割を遂行した。
- 2) 新宿 2 丁目の商業施設に毎週コンドームアウトリーチを行う「デリヘルプロジェクト」は、様々な啓発資材の配布、商業施設とのコネクションの形成を推進し、同時にコンドームデザインをおこなうデザイナーとのコネクションの形成と、コンドームの配布をするボランティアスタッフの受け入れ・育成の場となっている。また、今年度からはハッテン場への啓発資材のアウトリーチも開始した。
- 3) ゲイコミュニティへ出たての若いゲイを対象としたワークショップを開催し、レクリエーションを絡めて集客を図った。また、ゲイのセックスに絡んだ様々な話題を題材として、その方面の専門家を講師に迎えて講演会を行った。
- 4) 東京都や新宿区、横浜市などと連携して、検査機関や検査イベントのためのパンフレットの作製や配布、啓発資材の提供を継続しておこなった。
- 5) NPO 法人「ふれいす東京」との協働で、陽性者との共生を視点に入れながら予防啓発を推進する Living Together 計画の一環として、「Living Together Lounge (音楽とリーディングのタベ)」を毎月開催した。また、仙台において地元の CBO と協働して開催した。
- 6) Living Together 計画の一環として、EASY! ~Living Together is Easy (陽性者との共生・生きることや健康の大切さをコンセプトにしたプロジェクト) で昨年度作製した啓発資材の配布を継続した。また名古屋では資材をパネルにして展示をおこなった。セーフターセックスについて感染のメカニズムからアプローチした啓発資材を開発した。

コミュニティセンター「akta」を予防啓発活動の拠点として、各商業施設やメディア、NPO や行政、コミュニティ内で活躍するデザイナーや写真家・モデル・オーガナイザー・DJ などの各分野のキーパーソンとの啓発ネットワークを築き、訴求性のある啓発資材の開発と、ゲイコミュニティにアプローチする啓発体制が構築されつつある。その普及方法に一定の成果を得ることができた。また、若年の MSM が予防啓発活動に参加することで彼ら自身が啓発され、自発的に活動に関わる人材を育成する体制も確立されつつある。

### A. 背景と目的

厚生労働省エイズ発生動向における性的接触による HIV 感染者・AIDS 患者報告数はいまだ増加が続いており、男性同性間の性的接触による感染がその過半数を占めている。地域ブロック別では、東京およびその近県での増加に加え、近畿ブロック (大阪)、東海ブロック (愛知)、九州ブロック (福岡) などの都市部での増加が目立ってきている (図 1)。また、市川ら、内海らによると、東京、大阪、名古屋地域で MSM (Men who have sex with

men) の HIV 受検者における陽性率は 2-3% であり、梅毒抗体陽性率も一般に比べ高いことから、HIV を含む性感染症 (STI) に対する有効な予防対策が必要であることを示唆している。

HIV/AIDS および他の STI が MSM の間で流行してきた背景として、1) これまでの国民向けエイズ対策は MSM に訴求効果を示していない、2) これまでの MSM 向けの啓発資材開発や啓発普及は十分でなく、MSM に対する効果的なエイズ対策がない、3) 保健所等の無料 HIV 抗体検査・相談等の普及

および受検者への性感染症予防介入が十分でないことがあげられる。

わが国の男性同性間の HIV/AIDS 流行防止に有効な対策を構築するには、1) MSM に訴求性の高い啓発資材および有効な普及方法の開発、2) 予防啓発が届きにくい、避けてしまう層に対して予防意識を啓発する資材とその普及方法の開発、3) ハッテン場等の商業施設におけるコンドーム使用を促進する効果的な啓発手法の開発、4) ゲイ・NGO やゲイコミュニティと連携した有効な啓発普及体制の構築、5) 地域における MSM 対象のエイズ施策を構築する行政-NGO 間の連携推進、6) HIV/STI 検査機会の拡大とセクシュアリティを解した受検時の予防介入方法の開発、などを早急に検討する必要があると考える。

当研究は、日本国籍男性の同性間性的接触による HIV/AIDS 報告数が超過半数を占める東京およびその近県地域において (図2)、MSM を対象とした HIV/STI 感染予防対策を推進すべく、訴求性のある啓発資材および実効的な普及方法の開発を目標としている。東京の MSM への予防啓発をコミュニティベースで取り組むために、当事者参加によるプロジェクトを構築し、コミュニティと連携した予防啓発活動を展開するための方法を模索している。

東京を中心とするゲイコミュニティとしては、新宿2丁目を中心とした商業施設 (約 300 軒のゲイバー、ゲイショップ、クラブ、ハッテン場など) が集積している地域 (以下新宿2丁目) が、日本最大規模の地域型コミュニティとして存在して

いる。新宿2丁目はゲイ・バイセクシュアル男性が集まり交流する場としての歴史も古く、現在でも一日に数千人のゲイ・バイセクシュアル男性が出入りをしており、週末にはクラブイベントなども開催されるために全国からアクセスがある。ただし近年では、新宿2丁目以外にも商業施設が存在するようになり、主に上野・浅草地域、新橋地域、渋谷地域に集積している傾向にある。また、都内には約 90 軒のハッテン場が存在しているが、それらは点在している。メディアとしては主なゲイ雑誌社が都内に存在しており、それらに対する効果的なアプローチは東京のみならず全国に波及する可能性がある。しかし一方でインターネットの普及などにより、地域型コミュニティやハッテン場やゲイ雑誌にアクセスせずにゲイ活動をする人も増加してきており、東京地域のゲイコミュニティと言ってもその多様性は拡大しつつある。

HIV/AIDS や STI に対する認識 (知識や情報、予防行動) は、以前から我々が行ってきた調査によると、一般の国民と比較すると高い傾向にあるものの、認識の低い層も高率に存在していた。特に若年層は認識が低い傾向にある。

以上に示したような東京のコミュニティの多様性や、HIV/AIDS や STI に対する認識の多様性を考慮しながら、効果的な予防啓発を推進するためのプログラムを実施する必要がある。

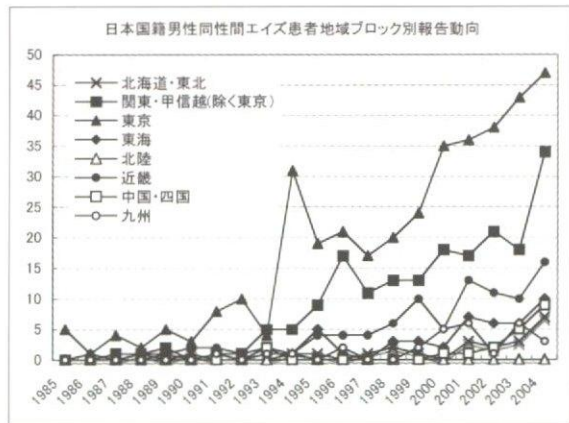


図 1

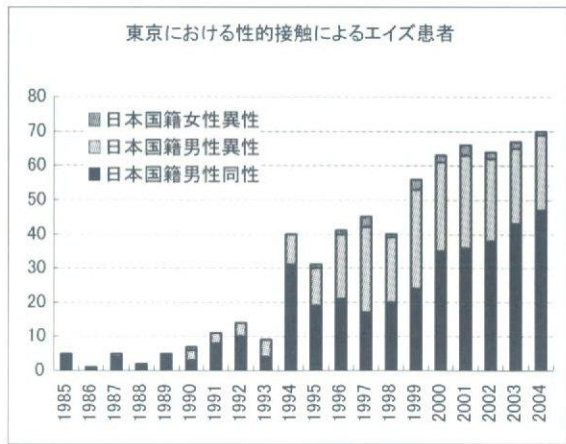


図 2

## B. 研究方法

### 1. 研究体制

本研究を始めるにあたり、地域ボランティア、イベント関係者、メディアや商業施設等の従事者などからなる地域ボランティア団体（CBO）として Rainbow Ring を結成し、研究協力体制の構築を図った。Rainbow Ring は啓発資材開発およびその普及を行うが、スタッフ各自がもともと有しているネットワークを活用しつつ、既存のゲイ NGO、ゲイメディア、ゲイビジネス等の関係者から協力を得るなどによって、予防啓発のためのネットワークを構築している。

Rainbow Ring は予防啓発活動の拠点として、新宿 2 丁目内にコミュニティセンター「akta」を設立し、運営している。「akta」は（財）エイズ予防財団の委託事業として設立された。

また、本研究で試行する啓発資材、普及方法の有効性についての評価は研究者が担当し、さらに地域での MSM を対象とするエイズ施策の継続性のために東京および近県の行政との連携を図っている。

東京では、エイズが問題となった当初からゲイ NGO が様々な活動を展開してきている。本研究は、今なお増加が続いている MSM における HIV 感染に対して、新たにその予防啓発の促進を目標として実施するものである。これまでの既存のゲイ NGO の成果を損ねることなく、Rainbow Ring を通じてこれらの NGO と協力連携しつつ予防対策の有り方を検討したい。

### 2. 予防啓発計画

2002-2004 年度（第 1 期）は、東京の MSM への予防啓発をコミュニティベースで取り組むための当事者参加によるプロジェクトの構築、予防啓発活動の拠点としてのコミュニティセンター「akta」の設立、ハッテン場・バー・クラブイベントなどの商業施設との協力関係の構築、デザイナーや写真家・モデルなどのキーパーソンとの協力関係の構築、行政・医療機関との協力関係の構築、他の NPO との協働の模索など、予防啓発のための体制作りを中心におこなった。さらにその体制をベースとして、MSM に訴求性のある予防資材・予防啓発プログラムを検討してきた。

2005 年度（第 2 期 1 年目）は、コミュニティセンター「akta」を予防啓発活動の拠点として、各商業施設やメディア、NPO や行政、コミュニティ内で活躍するデザイナーや写真家・モデル・オーガナイザー・DJ などの各分野のキーパーソンとの啓発ネットワークが構築された。このネットワークを活用した予防啓発プロジェクトを推進することにより、ゲイコミュニティにアプローチする啓発体制が構築され、訴求性のある啓発資材の開発と、その普及方法に一定の成果を得た。特に、感染者は可視化されにくいゆえに、ゲイコミュニティ内にもいまだに HIV に対する認識が低い層が存在する。その層に対するアプローチを意識して、「感染者との共生」を念頭に置いた予防啓発活動を展開した。また、若年の MSM が予防啓発活動にボランティアとして参加することで彼ら自身が啓発され、自発的に活動に関わる人材を育成



する体制を作ってきた。

2006年度（第2期2年目）は前年度の活動を継続し、ネットワークの拡大、ワークショップの充実を検討した。

具体的には以下の項目を計画した。

- 1) コミュニティセンター「akta」の周知方法を充実すると同時に、より利用しやすいスペースにする。
- 2) コンドームや啓発資材のアウトリーチのためのデリヘルボーイの活動を継続しながら、新宿2丁目以外のハッテン場へのアウトリーチも検討する。
- 3) デリヘルボーイを中心としたボランティアスタッフの研修を実施する。
- 4) 遠方のハッテン場へのアウトリーチを検討する。
- 5) 若年層やゲイコミュニティへのアクセス初心者を対象とした、レクリエーションとワークショップをセットにしたサークル活動を実施する。
- 6) HIV/STIに限らず、ゲイライフ全般から問題点を取り上げた講習会を開催する。
- 7) 「Living Together 計画」を継続し、他地域への拡充を実施する。
- 8) 予防の動機づけされた人が利用できる資材を開発する。
- 9) WEBの充実を図る。

### 3. 倫理面への配慮

男性同性愛者／両性愛者は、社会からの偏見・差別が強く、啓発活動を進める場合はこれらを配慮する必要がある。このため、本研究では、当事者と連携して調査、啓発等の内容を検討し、対象者を含めゲイコミュニティへの倫理的配慮を保ちつつ研究を進める。コンドーム啓発プログラムをゲイコミュニティに浸透させるためには、バー、クラブ、ハッテン場等の施設の協力が必須で、研究の主旨等を説明し、施設経営者等との相互理解、信頼関係を構築している。

## C. 研究結果

### 1. コミュニティセンター「akta」

コミュニティセンター「akta」は、MSMを対象としたコミュニティベースの予防啓発普及の拠点を目的に2003年8月設立された。運営はエイズ予防財団の「男性同性間のHIV/STI感染予防に関する啓発事業」を受託してRainbow Ringがおこなっている。ゲイコミュニティに根ざした予防啓発活動をするために、また無関心層を呼び込むためにもアクセスのしやすさを考え、ゲイ商業施設等の集中している新宿2丁目に設立し、入りやすくくつろぎやすい雰囲気を第一義に考えた。また展示も可能なスペースとした。事務局員が連日交代で勤務し、年末年始を除く毎日16時から22時まで開場している。

aktaは以下の活動をおこなっている。

- ・情報提供（予防啓発に関わる情報およびコミュニティ情報）
- ・リソースの開発・紹介
- ・啓発資材配布の拠点（資材の作製・梱包・配送・アウトリーチ等）
- ・HIV/AIDSに関わる人たちの利用（ミーティングや研修など）
- ・学習の場（ワークショップや講演会など）
- ・コミュニティスペース（ドロップインスペース、展示スペース、打ち合わせやミーティング利用など）

今年度からは事務局員を2名常駐体制とした。また、オープンスペースを拡大し、事務スペースと内部活動のスペース、クローズドミーティングのスペースを隣室に設けた。

#### 1) 来場者の動向

今年度のaktaへの1日平均来場者数の推移は以下のようなものである。月によりイベントの数でバラツキがあるが、年間を通して昨年より増加している。10月の来場者が少なかったのが突出している。

「akta」1日平均来場者数（人）

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
35.1	27.7	32.2	29.2	41.9	28.7	26.0	32.5	34.7	32.4	29.7
+3.7	+0.9	+2.9	+1.5	-2.9	+5.7	-12.9	+1.7	+5.0	+3.8	+1.6

## 2) akta の利用状況

akta は様々なミーティングやイベント、展示会などに利用されているが、今年度公開としておこなわれた展示会・講演会は、

- ・マイファーストドレス展 (4/1~4/8)
- ・emf exhibition 2006 「MIX」 (4/31~5/13)
- ・緊急シンポジウム (なぜHIV感染が広がったか) (5/15)
- ・大木裕之個展 (5/28~6/11)
- ・旭熊司展 (6/12~6/18)
- ・カラテセントラル展 (6/19~7/2)
- ・竹崎展 (7/3~7/16)
- ・Rainbow for evermore (7/17~7/23)
- ・性的マイノリティの30年とパレードの歴史展 (8/6~8/19)
- ・AGP マンスリーセミナー番外編 新木場事件を考えるー今回の事件をどう捉えるか メディア報道を踏まえて考えるー (8/9)
- ・Robomi OS展 ver2 (8/26~9/9)
- ・プロジェクトドレス展 (10/21~10/28)
- ・TAMATEN (11/5~11/11)
- ・熊谷尚樹展 (11/23~11/30)
- ・GUTS フレンズ展 (12/1~12/10)
- ・Jay 「Faces」展 (12/11~12/17)
- ・Nicko 展覧会 「ZUM」 (12/18~12/24)
- ・風太郎写真展 「ひとりぼっち」 (1/22~1/28)
- ・龍泉個展 「OHTORI」 (1/29~2/11)

などがある。また、定例的に、手話教室、韓国語講座、AGP マンスリーセミナー、AA (アルコール依存症からの回復) ミーティング、akta で話を聞く会、キラキラ☆ガールズ (女子向けの HIV/STI 啓発イベント) などに利用していただいている。

今年度も展示をしていただいたことをきっかけに、多くのアーティストに Rainbow Ring の活動に関わっていただけられるようになった。直接予防啓発に関わりのない内容の展示であっても、アーティスト自身が啓発資材や啓発活動に触れるきっかけとなっていると思われる。Rainbow Ring が作製したコンドームや各種パンフレットなどの資材のデザインなどは、最近ではそのほとんどを、展示をきっかけに Rainbow Ring の活動に興味を示していただいたアーティストに依頼している。

## 3) 相談

来場者から相談があった場合には、akta にある

資材や相談機関の紹介を原則にしている。現在、月に 2~6 件の相談があり、相談内容として多いのは「HIV 感染症」に関して (主に「HIV 検査機関」「感染不安」「医療機関」など) で、ついで「その他の性感染症」であった。相談については検査や病院、性感染症などの情報を充実させると同時に、持ちうる情報の提供にとどめ、感染不安などについてはアドバイスをしないことを了解の上、傾聴するに留めた。相談の対応については、プレイス東京の生島さんを講師に迎え、ケースカンファレンスをおこなった (8月23日)。

## 4) マンスリーakta

akta の情報紙を毎月発行しており、デリヘルプロジェクトやハッテン場プロジェクト、イベント折り込み、店舗での発送商品への折り込みなどを通じて配布している。akta のスケジュールや催し物の情報に加え、コミュニティ情報、医療や検査情報、Rainbow Ring の予防啓発活動の紹介も掲載するようになった。表紙にはコネクションのできたアーティストによるイラストや写真を掲載し、akta の情報と同時に、様々な情報を複合的に楽しく受け取ることができるように工夫をしている。毎月 5,000 部発行している。

## 5) PRHYSM

企画者である DJ ユメと毎回変わるゲスト DJ による音楽を楽しむイベントで、毎月最終日曜日に開催している。目当ての DJ を求めてイベントに参加するような「クラブ好き」の人達をターゲットに、akta の認知を広げるために企画された。また、DJ にとっても普段クラブに行かないような人達に対して、クラブの楽しさを伝え、自分の音楽への関心を高めてもらうための機会となっている。クラブイベントでは DJ は重要なキーパーソンであり、クラブイベントへのアプローチをしていく上で、DJ との関係づくりは重要であると考えている。各回 40~50 人の来場者があった。

## 2. デリヘルプロジェクト

新宿 2 丁目における重要な構成要因であるバーおよびクラブの顧客や従業員を対象とし、コンドームをきっかけとして AIDS/STI やセーフセックスを身近に意識してもらうことを目的に、コンドームアウトリーチをおこなっている。これはもともと自主的にコンドームの無料配布してい

た新宿 2 丁目の商業施設による団体「project com.」との協働事業であり、Rainbow Ring が人的提供およびコンドームの作製・提供をしている。

ボランティアスタッフ「デリヘルボーイ」(delivery health boys の略)により、毎週金曜日に新宿 2 丁目において、コンドームと啓発資材のアウトリーチをおこなっている。

今年度作製したコンドームパッケージは 12 種類であった。また、今年度は 30 回のアウトリーチで、1 回あたり 889~2,030 個、のべ 36,625 個のコンドームを配布した。配布したボランティアは各回 5~14 人であった。配布店舗数は 1 回あたり 135~141 軒であり、昨年度から横ばい状態である。

デリヘルボイの活動が定常的におこなわれるために徐々に認知も向上し、店舗との交渉がスムーズになり、デリヘルボーイによる各店舗からの意見や情報の収集も見られる。デリヘルボーイどうしで情報の交換や共有・問題提起や解決を図るようになってきた。

デリヘルボーイは、毎月数名ずつ新人が入ってきており、また同時に活動に参加しなくなる人もいるため、比較的出入りが激しい。デリヘルボーイとして参加することが、そのスタッフにとっての予防啓発のきっかけになることも予想された。また、アウトリーチをしている際に HIV/STI や予防について、または Rainbow Ring の活動の内容について質問をされることもある。彼らの中でそれを共有するような工夫をしているが、何らかの方法でデリヘルボーイへの情報の提供が必要である。

昨年度は「スタッフ向け講習会」を開催したが、今年度は後述の若年者を対象としたワークショップがスタートしたため、そちらへの参加を促した。しかし参加者が少なかったため(開催日がデリヘルの日と異なる)、デリヘルボーイを対象としたワークショップを再開した。12 月 9 日は JaNP+ のスピーカーを講師として招き、陽性者と意見交換をおこなった。

また、デリヘル活動後には必ずコアスタッフがミーティングに参加し、活動の経緯などについてコメントを加えた。

### 3. ハッテン場プロジェクト

昨年度はハッテン場利用者を対象とした啓発資材を作製して配布した。今年度はデリヘル等でアウトリーチする資材(Rainbow Ring のイベントのフライヤー、マンスリーakta、その他の啓発資材など)をハッテン場にも配布した。

ハッテン場の運営サイドとのネットワークを維持するために、昨年度まではオーナーや関係者を対象とした講習会やイベントを開催してきたが参加者が少なかったため、今年度はその形態の講習会は継続しつつ(後述)、配布方法についてはアウトリーチを中心に展開した。

新宿近辺のハッテン場(約 35 軒)については、デリヘルのアウトリーチと同時にあった。また、上野・浅草~東京・新橋の都心のハッテン場(約 16 軒)については、レンタカーでアウトリーチをおこなった。それ以外の遠方のハッテン場(約 16 軒)には郵送をした。それぞれ、月に 1 回のペースで配布をおこなった。定期的なアウトリーチは、運営サイドに Rainbow Ring の活動を認知・記憶してもらう効果があった。

### 4. G02' n とゴツスタ

若年層のゲイや、ゲイコミュニティに出始めの初心者を対象としたレクリエーション(G02' n=2 丁目に行こうの意味)と、HIV/STI やセーフセックスに関するワークショップ(ゴツスタ=G02' n study)がセットになったプログラムである。G02' n は偶数月、ゴツスタは奇数月に開催した。参加者はチラシ、mixi などで募った。

G02' n は 4/23、6/10、8/5、8/19、8/22、9/2、10/14、12/16 に開催し、首都近郊に一緒に出かけて友達を作ろうという主旨である。毎回 8~25 名の参加(毎回 2 名以上の初参加者あり)があった。

ゴツスタの開催日、参加者、内容は以下の通りである。

・5/27「初めての〇〇」

参加者数：19 名(スタッフ 4 名、新規 10 名、リピーター 5 名)

“初めての〇〇”と題して、〇〇をゲイ、SEX、彼氏、2 丁目、そして女装など幅広く話し合いながらも、目的としてお互いのセックスについて気軽に話し合えるように進化した。

また、SEX の延長線上で「初めての性感染症」の経験話しを集めたものを使って、淋病や尖圭コン

ジロームなど体験者ならではのエピソードを織り交ぜながら紹介した。

・7/22「夜は〇〇、思いっきりトーク」

参加者数：25名（スタッフ5名、新規6名、リピーター14名）

「未体験ゾーンセックスー自分で作るセーファーセックスへ！」と題して、アダルトグッズを紹介しながら、HIV/AIDSの感染経路について触れ、自分で考えるセーファーセックスを紹介した。また、「おもいっきり生電話」として、彼氏とエッチの相談から相手が生で求めてきたときのテクなどについて伝えた。間ではあきさせないためにも、バイアグラやまた巷で人気のエビオスなどセックスに関するサプリについて紹介もした。

・9/30「Reality〜It's your reality〜」

参加者数：24名（スタッフ5名、新規4名、リピーター15名）

HIV/AIDSについて遠くの存在だと思っている人は多く、今回は少しでもその距離感を縮めるために企画された。この回からLiving Togetherの手記の朗読も始めた。

・11/25「〜Living Together〜」

参加者数：28名（スタッフ5名、新規9名、リピーター14名）

世界エイズデー直前でもあったので、HIV/AIDSに焦点を絞った。前回からの朗読は継続し、今回からは視覚からも訴えかけるためにPLuS+で使用したスライドショー、他団体が制作した検査に関する映像をお借りして上映した。

・1/27「昇れ！2007年のH運！（ポボン）」

参加者数：24名（スタッフ4名、新規3名、リピーター17名）

様々なセックスの場面を想定して、よりセーファークセックスを行う方法を考え、意見交換を行った。

レクリエーションとセットにしたことで、比較的安定した参加者数（初参加者数も含む）が得られた。

## 5. ACADEMIA

昨年度までおこなっていた、ハッテン場経営者向けの講習会は、内容が一般のゲイも十分に聞きたい内容であること、ハッテン場の経営者だけに呼びかけても参加が得られない（かえって参加し

ずらい）ことから、今年度は対象を一般のゲイとして開催した。内容はゲイのセックスに関わる様々な話題をテーマに、その方面を専門としている講師を招いて講演会を開催した。参加者はチラシ、mixiで募った。

各回の開催日、参加者、内容は以下の通りである。

・4/16 参加者 20名

テーマ：ゲイの抑うつ傾向とリスクなSEXの関係、セックスに依存的になってしまうことの関係について

講師：京都大学医科学研究科 日高庸晴先生

内容：ゲイの人は、ヘテロセクシャルの人に比べて精神的な健康状態が悪い傾向にある、精神的に不安定な状態にある場合、リスクなセックスをしやすい傾向にある

・5/21 参加者 30名

テーマ：セックス依存傾向と関係した心の病気についての解説と予防法、処方箋について

講師：林義拓先生（国立精神・神経センター、精神科医）

内容：うつ病に関する一般知識、うつ病とよくうつ状態の違い

・7/8 参加者 13名

テーマ：HIVと福祉（HIVやうつになった際の障害者福祉や生活保護等行政が用意している福祉政策について）

講師：前田くにひろ先生（文京区議会議員）

内容：文京区での障害者支援について、生活保護で受けられるサービスについて

・9/18 参加者 14名

テーマ：HIV診療について

講師：根岸昌功先生（医師・駒込病院）

内容：HIV/AIDS診療の歴史

・3/18

テーマ：あなたの知らない射精の世界

講師：奥村俊子先生（医師・済生会川口総合病院）

内容：射精のメカニズムについて医学的に解説

各回とも非常に充実した内容の講習会であり、参加者は比較的関心を強く持った人が集まる傾向にある。直接の予防啓発を期待するというよりも、より充実したゲイライフを目的にすることで、HIV/STIの予防に波及する効果に加え、講師陣とのコネクション形成を担っていると考えられる。

#### 4. 医療・検査・行政との連携と情報提供

今年度の活動において、医療・検査機関、行政と協働して行ったものは以下の通りである。

##### 1) マンスリーakta 掲載ドクターのインタビュー

拠点病院で HIV の診療に携わっているドクターにインタビューを、マンスリーakta に掲載している。診療の中でゲイと接触することをどのように感じているかなどインタビューし、拠点病院での診療がゲイにとって敷居の高いものではないことを示し、診療を受ける上での参考にしていただくことを目的とした。また、ドクターに対しては、Rainbow Ring の活動を示し、コネクションを形成する。

##### 2) Living Together Lounge (後述)

Living Together 計画の一環として昨年度から行っているイベントである。東京都の委託事業として開催した。

##### 3) ACADEMIA (前述)

東京都の委託事業として開催した。

##### 4) 南新宿検査相談室のチラシの作製

「検査に行こうと思った」(恋人ができた/検査に行こうと思った/ドキドキする/もっとなんとやれば良かったよなあ) のキャッチコピーと Rainbow Ring と連携のできたデザイナー・イラストレーターと協働で作製した。

##### 5) 新宿保健所のゲイのための検査イベントの広報

新宿保健所が作製した検査イベント告知のチラシを、デリヘルプロジェクトを介して配布した。受検者のうち、チラシを見て来場した人が 2 割いた。

##### 6) 横浜市エイズ臨時検査 (12 月) のチラシの作製

「検査に行ってみよっかな。」「検査に行ってもよっかな。」のキャッチコピーと Rainbow Ring と連携のできたイラストレーターと協働で作製した。

##### 7) 仙台市での EASY!-Living Together is EASY!-写真展 (6-7 月) (後述)

仙台市の 2 カ所の会場で開催。

##### 8) 愛知県エイズキャンペーンでの EASY! パネル展 (12 月) (後述)

愛知県金山駅コンコースにて展示。

#### 5. Living Together 計画

陽性者との共生をテーマに、NPO 法人「ぶれいす東京」がはじめたプロジェクトである。予防とは陽性者を排除することではなく、陽性者と一緒にコミュニティに生きるからこそ予防が必要だという視点を持つためには、できるだけ陽性者を身近に感じられる工夫が必要である。

1) Living Together Lounge (音楽とリーディングのタベ) : クラブイベント会場・ミュージシャン・ゲイ著名人とのコラボレーションで実現している (毎月 1 回開催)。感染者やその周囲の人が綴った手記をゲイ著名人が朗読し、それについてコメントも述べる。その合間でライブミュージックおよび DJ の選曲・アレンジした音楽を楽しむイベントである。ミュージシャンからも自分自身と HIV 等の関わりについてのコメントをいただいたり、場の雰囲気にあった演出を心がけていただいている。7 月より会場が Arch に変わったため、以前よりも収容可能人数が増えたこともあり、毎回 50-120 人の参加がある。

##### 2) EASY! キャンペーン

昨年度「EASY!-Living Together is Easy」というコンセプトのもとに展開したキャンペーンで配布した、ブックレット、ポストカードブックの配布を、今年度も継続しておこなった。特にブックレットについては希望の問い合わせもあったため、増刷をして、希望したゲイバー、ハッテン場などに常備するように配布をした。

ポストカードブックのために撮り下ろした写真 (写真: 竹之内祐幸) は、大阪、仙台で展示会をおこなった。

また、ポストカードブックに掲載された写真・文章に、ヘテロセクシュアルを対象とした写真・文章も加えてパネルを作製し、愛知の金山駅でエイズキャンペーンの展示をした。この文章の特徴としては、HIV やセーフセックスそのものがテーマではなく、人生や生活、日常の中の一部としてとりあげられている。現代社会の中で見失いがちな、生きていることのかげがえのなさに気づいたり、相手を思いやったりする気持ちの中から、HIV の予防について意識を高める手法は、ゲイに限らず一般社会にも有効な手段であろう。

##### 3) Living Together のど自慢

Living Together Lounge がプロや人気のあるミュージシャン・アーティストの音楽を楽しむイベントであるのに対して、素人がカラオケを楽しみながら、手記の朗読とそれに対するコメントを述べていくイベントである。8/20 と 12/17、2/18 に新宿 2 丁目のバー「九州男」で開催した。毎回 12～14 人の方に出演をいただき、40～50 人の参加があった。

希望があれば誰でも参加できる参加型イベントであることと、以前より HIV 啓発活動に場所の提供等のご協力をいただいている「九州男」での開催という点からも、注目しているプログラムである。

#### 4) 東京ゲイ&レズビアンパレード 2006 でのフロートの出展

8/26 の東京ゲイ&レズビアンパレード 2006 において、Community Action for AIDS 2006 フロートとして出展した。パレードの中、唯一の HIV 関係のフロートである。白地の垂れ幕にピンクの文字で「HIV を持っている人も、そうじゃない人も。僕らはもう、いっしょに生きている。WE' RE ALREADY LIVING TOGETHER」と大きく綴ったシンプルなフロートであったが、メッセージ性があり、音楽も含めて好評であった。

#### 6. セーフーセックスガイドブック

昨年度の EASY! キャンペーンにおいて作製した「セーフーセックスガイド」を進化させ、STI の項目も掲載して小冊子にする予定。内容は、HIV に感染するリスクを低減する方法を、感染のメカニズムから考えるもので、陽性者・非陽性者に関わらず利用できるように配慮している。

#### 7. ホームページ

Rainbow Ring のホームページ以外に、コミュニティセンター「akta」、Living Together 計画、EASY! キャンペーンはそれぞれ独自のホームページを持っていて、今年度はさらに充実した。  
<http://www.rainbowring.org/>  
<http://www.rainbowring.org/akta/>  
<http://www.living-together.net/>  
<http://www.living-together.net/2005easy/>  
ホームページは予防啓発の情報提供に加え、我々の活動をコミュニティに紹介し、還元していくこ

とを目的にしている。キャンペーンの告知や終了後の御礼、または入手した予防啓発の情報をアップしている。

#### D. 考察

今後の課題としては、現在の情報化社会において、様々な情報の中から予防を選び取らせるような手法や内容を、常に開発し続けていかなければならないことがあげられる。特に、リスクを理解していながらあえて予防行動をとらない人々への啓発は、ハイリスクグループへのアプローチとして重要になってくるであろう。また、コミュニティレベルで予防啓発された人が、次の段階としてアクセスできるような個人レベルの啓発について、akta での相談も含めて充実させることが必要であると考ええる。さらに、新宿以外の首都圏の地域コミュニティへの啓発範囲の拡大も、今後視野に入れていかなければならない。

#### E. 結語

コミュニティセンター「akta」を予防啓発活動の拠点として、各商業施設やメディア、NPO や行政、コミュニティ内で活躍するデザイナーや写真家・モデル・オーガナイザー・DJ 等の各分野のキーパーソンとの啓発ネットワークを築き、訴求性のある啓発資材の開発と、ゲイコミュニティにアプローチする啓発体制が構築されつつある。また、若年の MSM が予防啓発活動に参加することで、彼ら自身が啓発され、自発的に活動に関わる人材を育成する体制も確立されつつある。

#### F. 発表論文等

口頭発表

- 1) 佐藤未光：東京のゲイコミュニティとエイズ 第 20 回日本エイズ学会市民公開講座 2006. 12、東京
- 2) 木村博和、佐藤未光、張由紀夫、市川誠一：東京における MSM 向け予防啓発プロジェクトの評価に関する研究、第 20 回日本エイズ学会総会、2006. 12、東京
- 3) 木村博和、星野国男、張由紀夫：保健所とエイズ予防啓発団体との協働による HIV/STI 臨時検査、第 20 回日本エイズ学会総会、2006. 12、東京

## 東京地区クラブイベント参加者のセックス併用薬剤と予防行動に関する研究

研究協力者:木村 博和(横浜市南福祉保健センター)、市川 誠一(名古屋市立大学大学院)  
佐藤 未光(Rainbow Ring 代表)、張 由紀夫(Rainbow Ring)

### 研究要旨

2005年のゲイ向けイベントでの質問紙調査を資料として、セックス時に併用する薬物の使用状況と、HIV/STI感染予防に関する知識や意識、コンドーム使用や抗体検査受検などの予防行動との関連について検討した。回答者のMSM934人のうち過去6か月間のラッシュ使用経験あり420人(45%)、ゴメオ77人(8.2%)、その他のいわゆる脱法ドラッグ46人(4.9%)であった。このうち過去6か月のアナルセックス経験者についてゴメオ等の薬物併用群とラッシュのみ併用群と併用薬物なし群の3群間で予防知識や意識、予防行動を比較すると、薬物併用群のコンドーム常用率は低く(42%、55%、58%)、感染リスクの自認は高値を示した(42%、26%、22%)。しかし抗体検査の受検率に違いは認められなかった(40%、41%、42%)。薬物併用群ではリスク行動を自覚しながらも抗体検査の受検行動に結びついていない可能性が示唆された。今後、東京地区のこれらのクラブイベント参加者に対してリスク行動の回避と受検行動を促進するための予防啓発の必要性があると考えられる。

#### A. 背景と目的

東京では2002年9月からゲイボランティアによるHIV/STI予防啓発プロジェクトRainbow Ringが新宿二丁目のゲイコミュニティやNPOと連携しながら、MSM(men who have sex with men)に対して予防啓発プログラムを実施してきている。2003年8月には啓発活動の拠点として新宿二丁目にコミュニティセンター(aktaアクタ)を開設し、活動の存在を実体として顕在化させ、予防啓発のより一層の普及、促進を図っている。

本研究班では、東京におけるこれらの予防啓発プログラムの普及状況と、HIV/STI予防の知識

や意識、行動への効果を調査、検討しながら、より効果的なプログラムの開発を目指している。

本報告では、2005年の東京地区のクラブ調査の情報を資料として、MSMにおけるセックス時の併用薬物とHIV/STI予防に関する知識や意識、行動との関連について分析、検討したので、その結果について報告する。

#### B. 研究方法

##### 1. 調査方法

2005年6月から8月に東京都江東区新木場、

並びに新宿区新宿二丁目地区で開催された3回のゲイ向けクラブイベントの参加者を対象として無記名の自記式質問紙調査を行った。イベント会場において調査員が調査の趣旨と内容を口頭で説明、協力を依頼し、同意の得られた人にその場で質問紙を配布し、回答を依頼した。記入した質問紙は当日その会場内で回収し、回答者には謝礼としてドリンクチケットを渡した。なお回答者のプライバシーに配慮し、回収時には無回答や誤回答のチェックは一切行わなかった。回収数は1003件であった。

質問紙は本研究班で独自に作成したもので、調査項目はHIV/STI予防の知識6問、HIV予防の意識2問、性行動4問、予防行動4問、受検行動1問、Rainbow Ringの予防啓発関係5問、人口統計学的項目4問の全26問からなっていた。

## 2. 分析方法

回答者から重複回答を除外した後、①自認するセクシャリティに関する質問にゲイまたはバイセクシャルと回答した人、あるいは②性行動に関する質問において過去に男性とセックスの経験ありと回答した934人の中から、過去6か月間にアナルセックスの経験があり、しかもセックス時の併用薬物等に関する質問に回答した648人(平均年齢29.2歳)を分析対象者とした。この分析対象者を、過去6か月間のセックス時併用薬物の使用状況から、薬物併用群(セックス時に5MEO-DIPT等いわゆる脱法ドラッグ併用の経験ありと回答した群)、ラッシュ群(セックス時に脱法ドラッグの併用はないがラッシュ併用の経験ありと回答した群)、併用なし群(セックス時に上記薬物の併用経験なしと回答した群)の3群に分類し、この3群間で性行動やHIV/STI予防に関する知識や意識、予防行動、Rainbow Ringの予防啓発プログラム

への接触状況を比較することにより各群の特性を明らかにした。3群間の比較に際しては統計的検定を行い、その有意確率がおおむね0.1未満( $p < 0.1$ )をその差異の有無を判定する指標とした。統計的検定には質問の回答が名義尺度の場合は $\chi^2$ 検定、順序尺度の場合はKruskal-Wallis検定、正規性を仮定した数量データの場合は分散分析を行った。回答の集計、統計的検定にはパソコン用統計解析パッケージHALBAU for Windows Ver. 5.44(現代数学社、京都、2002年)を使用した。

## C. 研究結果

### 1. 対象者の属性と施設等の利用状況

回収数は1003件であったが、重複回答を除外し回答からMSMと判定したのは934人であった。このうち併用薬物の質問に回答したのは875人(94%)、各薬物の使用経験ありと回答した人(複数回答可)はラッシュ420人(45%)、ゴメオ77人(8.2%)、その他の脱法ドラッグ46人(4.9%)であった。このうち「過去6か月間にアナルセックスしたことがある」人は648人、これを使用状況から3群に分類すると、分析対象者は薬物併用群91人(14%)、ラッシュのみ群293人(45%)、併用なし群264人(41%)であった。

対象者の属性を表1に示す。平均年齢は薬物併用群でわずかに低い傾向がみられたものの明らかに高いとはいえなかったが、年齢分布をみると薬物併用群で30代前半が半数近くを占めていた。調査したクラブイベント別にみると薬物併用群とラッシュ群でイベントAの参加者が多く、イベントBの参加者が少なかった。居住地やセクシャリティには特に差異を認めなかった。

対象者の施設利用状況と性行動について表2



に示す。新宿二丁目に行く頻度についてみると、薬物併用群とラッシュ群で過去6か月間に「週に1回以上」行ったと回答した人が多かった。過去6か月間の施設等の利用状況についてみると、薬物併用群とラッシュ群でゲイバー、ゲイナイト、ハッテン場、出会い系サイトのいずれについても併用なし群より利用者が多かった。特に商業系ハッテン場や出会い系サイト(パソコン用)については、ラッシュ群より薬物併用群でさらに利用者が多かった。アナルセックスの相手人数は薬物併用群とラッシュ群で5人以上と回答した人が多かった。

## 2. Rainbow Ringの啓発資材への接触状況

Rainbow Ringが展開する予防啓発プログラムへの接触状況について表3に示す。

啓発用コンドームの入手状況を見ると、ラッシュ群で「ゲイバー」、「イベント会場」、「aktaアクタ」のいずれかで貰った人が併用なし群より多かった。各々の入手場所については明らかな違いがみられなかった。コンドーム以外の啓発資材ではハッテン場向けポスター(「つけてやろうせ」、「まあいっかじゃないよね?」)やHIV陽性者の手記集(「Living Together Letters」)を見たことがある人はラッシュ群と薬物併用群で多かった。医療・検査情報ペーパー(「S/H」)を見たことがある人はラッシュ群で多かった。これらいずれかの資材を見たことがある人もラッシュ群と薬物併用群で多かった。Living Together Lounge(陽性者手記の朗読とライブパフォーマンスの複合型啓発イベント)を知っている人(「聞いたことがある」人と「行ったことがある」人の合計)はラッシュ群と薬物併用群で多かったが、コミュニティセンターを知っている人の割合は3群間に違いを認めなかった。

## 3. HIV/STI予防の知識と意識

対象者のHIV/STI予防に関する知識や意識についての集計結果を表4に示す。「STI感染の影響によるHIV感染しやすさ」の正答率は、ラッシュ群で高かった。知識に関する質問6問中の総正答数についてみると、中央値には違いを認めなかったが、その分布では薬物併用群で二峰性を認め他2群と異なっていた。東京都の南新宿検査相談室で実施する土日検査を知っている人は、薬物併用群やラッシュ群で多かった。

過去の性行動を振り返ってHIVに感染する可能性があったと思うかという問いに対して、3割弱の対象者が「十分可能性があった」と回答したが、薬物常用群では4割以上が「可能性があった」と回答しラッシュ群や併用なし群より感染リスクを自認する人が多かった。

## 4. コンドーム使用状況について

過去6か月間のアナルセックス時のコンドーム使用状況について表5に示す。特定相手との挿入時のコンドーム常用率(「毎回使った」人の割合)はラッシュ群と併用なし群で高く、「全く使わなかった」人は併用なし群と薬物併用群で多かった。特定相手との被挿入時の常用率はラッシュ群で高かった。不特定相手との挿入時の場合、薬物併用群で低かった。これら過去6か月間の相手、行為別コンドーム使用状況の回答からすべてのアナルセックスを通じての常用率をみると、併用なし群とラッシュ群で高かった。「最後にしたアナルセックス」でのコンドーム使用状況についてみると、使用率は高い方から薬物併用群、ラッシュ群、併用なし群の順であった。セックス時の併用品としてのコンドーム使用率は薬物併用群やラッシュ群で多かった。なお薬物併用群でのラッシュ使用率は8割以上を示した。

## 5. コンドーム購入と抗体検査について

過去6か月間のコンドーム購入経験と過去1年間のHIV抗体検査の受検経験を表6に示す。

購入経験者の割合に違いはみられなかったが、購入場所についてみると、「ゲイショップ」は薬物併用群とラッシュ群に多く、「ハッテン場」は薬物併用群、ラッシュ群、併用なし群の順であった。

抗体検査の受検率は3群間に違いはみられなかったが、受検場所についてみると「南新宿検査相談室」が薬物併用群で多かった。

## D. 考察

本研究班においてHIV／STI感染予防対策を推進する中で、予防行動の阻害要因としてセックス時に併用する薬物の影響が懸念されていた。そこで使用状況と予防行動との関連を明らかにするため、東京での3回のクラブ調査において5MeO-DIPT(ゴメオ)などいわゆる脱法ドラッグとRUSH(ラッシュ)の使用状況について調査を行った。

調査時点でゴメオやラッシュはすでに法規制されており、しかも調査方法がクラブイベント参加者への自記式質問紙によるものだったため、プライバシーへ十分な配慮がされたといえる状況ではなかった。また質問形態は「過去6か月間のセックス時に併用したもの」の3つの選択肢、ゴメオ、ラッシュ、その他の脱法ドラッグから選んでもらう方法を取り、しかもその他のドラッグの内容は聞いていないことから、その信頼性にはある程度限界があった。分析に際しては、併用薬物についての回答から回答者を薬物併用群、ラッシュ群、併用なし群に分類し、比較したが、3群の「過去6か月間のアナルセックス経験者」の割合が異なったことから(91%、87%、60%)、分析対象者をアナルセックス経験者に限定した。

3群を比較したところ、3群間の特徴にいくつかの違いが認められた。異なっていたのはアナルセックスの相手人数やコンドームの常用率や、予防知識、感染リスク自認、啓発資材への接触状況など予防対策上重要な事項であった。

特に薬物併用群では相手人数が多く、ハッテン場や出会い系サイトの利用者が多いのに常用率は低く、感染リスクの自認が高い状況が認められたことから、感染リスクを自覚しながらもコンドームを常用していなかった可能性がある。ただ最後のアナルセックスでのコンドーム使用率が高いことから、過去の感染リスクの高い行動を自覚し、その後はコンドーム使用率が高くなった可能性も否定できない。コンドームの購入率(購入経験ありの割合)は3群間に違いがみられなかったものの、薬物併用群の性行動の活動性の高さを考慮すると、相対的な購入率は少ないとみることもできる。これは抗体検査の受検率についても同様で、相対的な受検率の低さを考えると、過去の感染リスクを自覚しながら受検行動には繋がっていない人が多いのかもしれない。また啓発資材への接触度が高いにもかかわらず予防知識の正答数が少ない人もかなり混在することから、予防知識が乏しいため感染リスクの高い行動をしていた人も少なからず存在するであろう。

一方、ラッシュ群は薬物併用群と同様にアナルセックスの相手人数が多く、ハッテン場や出会い系サイトの利用者が多かったが、コンドーム常用率は薬物併用群や併用なし群より高い値を示した。特に不特定相手との常用率は高率であった。その上、啓発資材への接触率も高く、予防知識の正答数も多かったことから、感染リスクの高い行為時の予防行動を行うことができる集団と考えられる。しかしコンドームの購入率や抗体検査の受検率は、その性行動の活動性の高さから考えると薬物

併用群と同様、相対的には必ずしも高いとは言えず、十分な予防行動がとられていない可能性もな  
いわけではない。ただし受検行動については感  
染リスクの自認も少ないことから、必要性を感じて  
いない人も多いのかもしれない。

今回、3群間の予防行動を比較したところ、特定  
相手や不特定相手との挿入時のコンドーム常用  
率において薬物併用群で低値を認めた。またあら  
ゆる状況でのアナルセックスを通じての常用率も  
薬物併用群で低かったが、併用なし群の常用率  
にしても54%であり、HIV感染予防から十分な行  
動がとれているとは言い難い。また今回の調査で  
は薬物併用時のコンドーム使用状況や薬物使用  
頻度や種類、あるいはアルコールの影響につい  
て調査したわけではないし、感染リスク行動が相  
手人数の影響を受けている可能性もある。しかし  
今回の調査結果は、HIV予防啓発プログラムの  
対象を考えると、ゴメオ等のいわゆる脱法ドラッ

グの使用経験者を対象として何らかの予防介入  
プログラムを展開することがMSMにおけるHIV  
予防対策を進める上で重要であることを示唆して  
いると考えられる。

## E. 結論

2005年の東京地区でのクラブ調査のデータを  
用いて、セックス時に併用する薬物とのHIV/ST  
I感染予防行動との関係について調査した。ゴメ  
オ等いわゆる脱法ドラッグの使用経験者でコンド  
ーム常用率の低値を認めた。またこれらの使用経  
験者では感染リスクを自認していたが、抗体検査  
の受検行動に結びついていない可能性が示唆さ  
れた。今後、東京地区のこれらのクラブイベント参  
加者に対してリスク行動の回避と受検行動を促進  
するための予防啓発の必要性があると考えられ  
る。

表1 対象者の属性

	薬物併用群 (%) n=91	ラッシュ群 (%) n=293	併用なし群 (%) n=264	合計 (%) n=648	p値
<b>調査対象のクラブイベント</b>					
イベントA	66 ( 72.5)	216 ( 73.7)	179 ( 67.8)	461 ( 71.1)	0.00320
イベントB	2 ( 2.2)	16 ( 5.5)	34 ( 12.9)	52 ( 8.0)	
イベントC	23 ( 25.3)	61 ( 20.8)	51 ( 19.3)	135 ( 20.8)	
<b>調査対象のクラブイベント</b>					
イベントA	66 ( 10.2)	216 ( 33.4)	179 ( 27.7)	647 ( 100)	
イベントB	2 ( 2.1)	16 ( 17.0)	34 ( 36.2)	94 ( 100)	
イベントC	23 ( 11.9)	61 ( 31.6)	51 ( 26.4)	193 ( 100)	
<b>過去のクラブ調査への回答経験</b>					
ない	83 ( 91.2)	259 ( 88.4)	237 ( 89.8)	579 ( 89.4)	0.94102
以前にある	6 ( 6.6)	24 ( 8.2)	20 ( 7.6)	50 ( 7.7)	
わからない	2 ( 2.2)	10 ( 3.4)	7 ( 2.7)	19 ( 2.9)	
<b>年齢</b>					
平均値(標準偏差)	28.8 ( 5.9)	29.2 ( 6.1)	30.0 ( 5.4)	29.1 ( 5.9)	0.14680 0.09757 KW
～24歳	15 ( 16.9)	70 ( 24.3)	69 ( 27.1)	154 ( 24.4)	
25～29歳	20 ( 22.5)	84 ( 29.2)	69 ( 27.1)	173 ( 27.4)	
30～34歳	41 ( 46.1)	80 ( 27.8)	76 ( 29.8)	197 ( 31.2)	
35～39歳	10 ( 11.2)	43 ( 14.9)	28 ( 11.0)	81 ( 12.8)	
40～44歳	2 ( 2.2)	7 ( 2.4)	10 ( 3.9)	19 ( 3.0)	
45歳～	1 ( 1.1)	4 ( 1.4)	3 ( 1.2)	8 ( 1.3)	
<b>居住地</b>					
東京	62 ( 68.9)	200 ( 68.5)	175 ( 66.5)	437 ( 67.8)	0.90677
神奈川	7 ( 7.8)	32 ( 11.0)	33 ( 12.5)	72 ( 11.2)	
埼玉	8 ( 8.9)	24 ( 8.2)	16 ( 6.1)	48 ( 7.4)	
千葉	3 ( 3.3)	12 ( 4.1)	13 ( 4.9)	28 ( 4.3)	
栃木・茨城・群馬	2 ( 2.2)	5 ( 1.7)	3 ( 1.1)	10 ( 1.6)	
その他	8 ( 8.9)	19 ( 6.5)	23 ( 8.7)	50 ( 7.8)	
<b>セクシャリティ</b>					
ゲイ(同性愛者)	86 ( 94.5)	266 ( 91.4)	237 ( 89.8)	589 ( 91.2)	0.53439
バイセクシャル	5 ( 5.5)	22 ( 7.6)	21 ( 8.0)	48 ( 7.4)	
わからない	0 ( 0)	3 ( 1.0)	4 ( 1.5)	7 ( 1.1)	
その他	0 ( 0)	0 ( 0)	2 ( 0.8)	2 ( 0.3)	

表2 施設等の利用状況と性行動

	薬物併用群 (%) n=91	ラッシュ群 (%) n=293	併用なし群 (%) n=264	合計 (%) n=648	p値
<b>過去6か月間の新宿二丁目へ行く頻度</b>					
行かなかった	3 ( 3.4)	8 ( 2.8)	27 ( 10.3)	38 ( 5.9)	0.00037
半年に1～2回	11 ( 12.4)	25 ( 8.6)	35 ( 13.3)	71 ( 11.1)	
半年3～5回	10 ( 11.2)	42 ( 14.5)	40 ( 15.2)	92 ( 14.3)	0.00010 KW
月に1～3回	30 ( 33.7)	127 ( 43.8)	105 ( 39.9)	262 ( 40.8)	
週1回以上	35 ( 39.3)	88 ( 30.3)	56 ( 21.3)	179 ( 27.9)	
<b>過去6か月間の施設等利用状況</b>					
ゲイバー	79 ( 86.8)	254 ( 86.7)	202 ( 76.5)	535 ( 82.6)	0.00349
ゲイナイト	77 ( 84.6)	237 ( 80.9)	171 ( 64.8)	485 ( 74.8)	
PC用出会い系サイト	46 ( 50.5)	108 ( 36.9)	64 ( 24.2)	218 ( 33.6)	0.00001
携帯用出会い系サイト	31 ( 34.1)	94 ( 32.1)	51 ( 19.3)	176 ( 27.2)	
マンション系ハッテン場	38 ( 41.8)	113 ( 38.6)	48 ( 18.2)	199 ( 30.7)	<0.00001
サウナ系ハッテン場	39 ( 42.9)	86 ( 29.4)	38 ( 14.4)	163 ( 25.2)	
その他のハッテン場	20 ( 22.0)	40 ( 13.7)	17 ( 6.4)	77 ( 11.9)	0.00018
<b>出会い系サイト利用(再掲)</b>					
なし	36 ( 39.6)	152 ( 51.9)	178 ( 67.4)	366 ( 56.5)	0.00001
1種類	33 ( 36.3)	80 ( 27.3)	57 ( 21.6)	170 ( 26.2)	
2種類	22 ( 24.2)	61 ( 20.8)	29 ( 11.0)	112 ( 17.3)	
<b>商業系ハッテン場利用(再掲)</b>					
なし	33 ( 36.3)	138 ( 47.1)	192 ( 72.7)	363 ( 56.0)	<0.00001
1種類	39 ( 42.9)	111 ( 37.9)	58 ( 22.0)	208 ( 32.1)	
2種類	19 ( 20.9)	44 ( 15.0)	14 ( 5.3)	77 ( 11.9)	<0.00001 KW
<b>アナルセックス相手人数</b>					
1人	10 ( 11.0)	36 ( 12.3)	77 ( 29.3)	123 ( 19.0)	<0.00001
2～4人	17 ( 18.7)	83 ( 28.3)	62 ( 23.6)	162 ( 25.0)	
5人以上	34 ( 37.4)	85 ( 29.0)	40 ( 15.2)	159 ( 24.6)	0.00286 KW
無回答	30 ( 33.0)	89 ( 30.4)	84 ( 31.9)	203 ( 31.4)	